Nakahara Chūya
Memorial Museum

◎特別寄稿

悲しみと愁しみ
——中原中也と小林秀雄
若松英輔

散歩する思考
最果タヒ

◎テーマ展示
「中原中也の散歩生活」

◎特別企画展
「詩が生まれた場所へ
——中也の見た風景」

◎企画展
「山頭火と湯田温泉」
「コミックのなかの中也」
「山口盆地考2018 .....吹き来る風が.....」

◎新収蔵資料紹介
小林秀雄宛中原中也書簡
「羅甸区」

◎生誕110年に寄せて
記念館事業
合唱オペラ「中也！」
こおりやま文学の森資料館特別企画展「中原中也 祈りの詩」
「中原中也が結ぶ　福島と山口の絆」
山口きずな音楽祭 vol.9「中也をうたう」

主なできごと（平成29年度行事記録）
第23回中原中也賞受賞作品
平成30年度記念館関連行事予定

中原中也記念館
館報2018

23

Public relations magazine
第23号

悲しみと愁しみ
——中原中也と小林秀雄

若松 英輔

古代の女性は、いくつもの色を重ねた衣をまとい、折り重なる、容易に言葉にならない情感を色という沈黙の言葉で伝えようとした。そうした衣が醸し出す、意味をたたえた色彩を「色の襲（かさね）」という。現代ではあまり用いることはないが「襲る」と書いて「かさねる」と読む。「龍」という異界の生きものに「衣」という文字からも感じとれるように、「襲」の文字には不可視な何かを折り重ねる、という語感がある。

恋慕の気持ちも女性が色によって表現しようとしたものの一つだろうが、季節やそれに伴う情感を示したりもした。「かなしみ」もそうした心持ちの一つだった。

「かなしみ」は「悲しみ」あるいは「哀しみ」とだけ書くのではない。古代では「愛し」、「美し」と書いても「かなし」と読んだという。

> 悲しみは慈（いつくし）みでありまた「愛（いとお）しみ」である。悲しみを持たぬ慈愛があろうか。それ故慈悲ともいう。仰いで大悲ともいう。古語では「愛し」を「かなし」と読み、更に「美し」という文字をさえ「かなし」と読んだ。
>
> （柳宗悦『南無阿弥陀仏』）

「悲し」は、悲痛というようにある人間が心身の実感を深くともなって経験する感情を指し、「哀し」は、悲哀というように「悲」に近しい情感でもあるのだが、「哀」の文字は「哀れ」とも読むように、自己の「悲しみ」の経験から他者の悲しみを写しとる状態をもいう。

「愛し」は、「悲しみ」とはその人が真に愛したものを失ったときにだけ経験するもので、悲しみは心の奥に潜んでいた情愛の発見でもあることを示している。

「美し」は、悲に貫かれた愛しみ、あるいは悲を淵源とした哀しみほど美しい心持ちはなく、「かなしみ」を通じて認識する世界にこそ美の実相が豊かに顕われることを示しているように思われる。

「かなしみ」、あるいは「かなしさ」は、小林秀雄の作品を読み解くもっとも重要な鍵語の一つで、ことに亡き母に捧げた「モオツァルト」以降、その重みは一段と大きくなる。

> モオツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡（うち）に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂いの様に、「万葉」の歌人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉の様にかなしい。
>
> （「モオツァルト」）

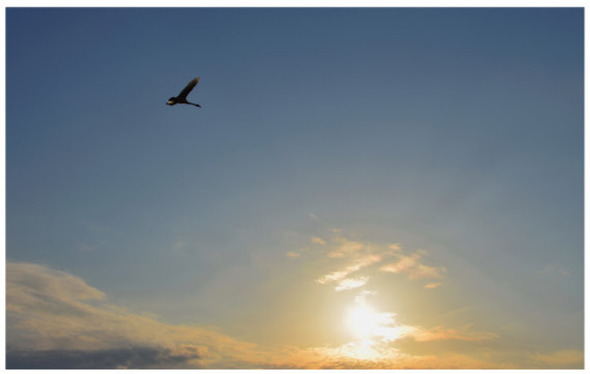
ここでの万葉の時代における「かなし」とは、柳宗悦の文章にあったように「悲し」そして「哀（かな）し」という四つの「かなし」が多層的に折り重なっている状態をいうのだろう。

これらの四つの「かなしみ／かなしさ」を感じつつ、「モオツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない」との一節を読む。そこには涙を流すこともできないような身を打ちくだかれそうな悲しみの現実のなかではじめて、愛を発見し、人生の秘密を目の当たりにし、深いよろこびに包まれているひとりの男の姿が浮かんでくる。

だが、小林の文章を読んでいると、少し変わった文字で「かなしみ」を表現しているのに出会う。次に引く一節は「蘇我馬子の墓」（一九四八）にある。

> 景行時代の国家の大事は、内乱の鎮圧にあったが、身を挺して事に当ったのは、日本武尊（やまとたけるのみこと）であった。打続く征戦に疲れ、尊は能褒野（のぼの）に死に、「独り曠野に臥して誰にも語ること無し」というその愁（かな）しみは、白鳥と化（な）って、天に翔（かけ）ったと史は言う。

ここでの「史」は『日本書記』である。この史書の作者は、日本武尊の「愁しみ」は、白鳥に姿を変え、天昇したという。



その「愁しみ」が日本武尊の個的なそれなら、鳥となって飛翔することはないのだろう。それは一個の存在に顕現した、ある共同体の感情だった。

万葉の時代において鳥は、天界と地上界をつなぐものであり、生者と死者のあいだを結ぶものだった。人は鳥に言葉を託して亡き者に届けようとした。

「愁しみ」と読むという用い方は小林の文章にはあまり見られない。むしろ、多くは「悲しみ」の文字が使われている。たとえば同じ作品にも「悲しみ」と記された一節はあるのである。

十七条の訓戒なぞ、誰も聞くものはない、守るものはない、それを一番よく知っているのは、これを発表した当人である。どうしてそんな始末になったか当人も知らない。彼の悲しみは、彼の思想の色だ。

（「蘇我馬子の墓」）

ここでの「彼」は聖徳太子である。憲法を作ってもそれを真剣に遵守する者など存在しない。たとえそうだったとして、言葉を世に送りださなくてはならないそこには人間の愚かさの実相を知った彼の悲しみがある。それがそのまま悲願となったのが十七条の憲法だった。

小林のいうように、太子の悲しみは、彼の思想の色――すなわち十七条の憲法にたゆたっている名状し難い色――をしているのかもしれない。それは悲哀と悲愛がからみ合ったような「悲しみ」だったのではあるまいか。ともあれ、それが「愁しみ」とは、幾ばくか色合いを異にする「かなしみ」であることは明らかだ。そうでなければ、小林が、先に引いた同じ作品にある日本武尊をめぐる一節で、あえて用い慣れない「愁しみ」という文字を用いる理由が無くなってしまう。

「愁しみ」という文字を少なからず用いたのが中原中也だった。小林は中也から「愁しみ」の文字を受け継ぐことでその世界を自分で感じ、深めようとしている。たとえば、中也の「月」は次のような一節から始まる。

今宵月はいよよ愁しく、
養父の疑惑に瞳を睜る。
秒刻は銀波を砂漠に流し
老男の耳朶は蛍光をともす。

人が月を悲しげに見ているのではない。「月」が「愁しい」というのである。短歌から出発しているこの詩人のなかには、ひとりの歌人が生きている。その情感が、近代という時代のなかで個の事情で湧き上がる感情とは異なる「かなしみ」を表わそうとするとき、「愁しみ」という文字が浮かび上がってきたのだろう。

最もよく知られている「愁しみ（愁み）」を歌った詩は「帰郷」かもしれない。

柱も庭も乾いてゐる
今日は好い天気だ
　　椽の下では蜘蛛の巣が
　　心細さうに揺れてゐる

山では枯木も息を吐く
あゝ今日は好い天気だ
　　路傍の草影が
　　あどけない愁みをする

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
　　心置なく泣かれよと
　　年増婦の低い声もする

あゝ　おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

ここでは「愁みをする」という一つの動詞になっている。草影が、あどけなく「愁み」の化身となって、世に「愁み」が存在することを告げ知らせる、というのだろうか。ここでも主格は人ではない。万物を司る何ものかが、草々に秘義を託す。そこに無常の光景がうちひろがる。別の言い方をすれば、時間という過ぎ行くものを突き破って永遠が姿を顕わしたといってもよい。

中也も小林同様「悲しみ」の文字もしばしば用いる。引用するまでもないが、次の一節を引けば充分だろう。

汚れつちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れつちまつた悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる

（「汚れつちまつた悲しみに……」）

ここでの主体は、中也本人かどうかはともかくとして、詩的人格としての「私」である。先に見た聖徳太子の「悲しみ」も、それがどんなに慈愛に満ちていたとて聖徳太子という一つの人格によって生きられた「悲しみ」だった。

「悲しみ」は、どんな人間であれ、ある人の心を淵源とする。だが、「愁しみ」は違う。それは存在の深みからかやってくる。詩となるときも、しばしば非人称的な性格を帯びてくる。

訳詩においても中也は「愁しみ」の文字を用いる。次に引くのはボードレール「饒舌」と題する作品の訳だ。

君は明るい薔薇色の、美しい秋の空！
だが愁しみは私の上に、海のやうには
　　やつてきて、
去りがてにはこの陰気な脣に
苦さに傷む、かの思ひをば残すのだ。

「愁しみ」が、人間のもとを訪れる。ふいに自分の事情や状況とはまったく異なる事情を背景にして「愁しみ」が人を襲う。人間はそれを拒むことができない。むしろそれを受け止めることこそが詩人の使命だった。少なくともボードレールはそう考えていた。また、中也はこの詩人の境涯を「愁しみ」という一語で示そうとしている。

中也の「寒い夜の自我像」にも「愁しみ」が用いられている。一見するとこれまでとは少し異なって見えるかもしれない。

きらびやかでもないけれど
この一本の手綱をはなさず
この陰暗の地域を過ぎる！
その志明らかなれば
冬の夜を我は嘆かず
人々の憔悴のみの愁しみや
憧れに引廻される女等の鼻唄を
わが瑣細なる罰と感じ
そが、わが皮膚を刺すにまかす。

ここでの「愁しみ」は、人間が生きていることそのものにまつわる「愁しみ」、原罪に似た「原悲」ともいうべき「愁しみ」であるように感じられる。

「原悲」という表現は筆者の造語ではない。この言葉によって人間の根本感情の顕われにほかならない、にふれようとしたのはユング派の深層心理学者で心理療法家の河合隼雄である。河合は、心理療法家としての経験を重ねるうちに、人間の、少なくとも日本人の心情の底をながれるのは「かなしみ」であると感じるようになったいう。

『神話と日本人の心』で河合が指摘するように、「あわれ」という感情は人類が生類と心を重ね合わせるところに生まれるものだが、それは一時の心情の移り変わりではなく、ある文化的な共同体の根本感情の顕われにほかならない、というのである。

小林秀雄はユングをよく読んでいた。最後の作品で論じたのもユングだった。もし、中也がもう少し生きて、ユングを読んだらと想像してみる。彼は、自身の内なる歌人、内なる古の人の眼で見、心で引き受けたものをめぐってさらなる言葉を残したのではなかったか。

だが、その軌跡は現存する言葉のなかにも残っている。それを見出し、そこに潜む意味を感じ直すのは読者である私たちの役割なのだろう。

若松　英輔　*Wakamatsu Eisuke*

1968年生まれ。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。「越知保夫とその時代　求道の文学」で三田文学新人賞受賞。『叡知の詩学　小林秀雄と井筒俊彦』で西脇順三郎学術賞を受賞。評論等に『井筒俊彦　叡知の哲学』『魂にふれる　大震災と、生きている死者』『池田晶子　不滅の哲学』『吉満義彦　詩と天使の形而上学』『霊性の哲学』『悲しみの秘義』など、詩集に『見えない涙』『幸福論』がある。また、中島岳志との共著に『現代の超克――本当の「読む」を取り戻す』、和合亮一との共著に『往復書簡　悲しみが言葉をつむぐとき』、編著に『小林秀雄　越知保夫全作品』がある。2017年12月に『小林秀雄　美しい花』を刊行。そこで中原中也と小林秀雄について2章を割いて論じている。

散歩する思考

最果 タヒ

なんの目的もなく歩いていると、帰るということを忘れていくことがある、そういう日は調子が良くて、いまもう一歩進めることにならなんの問題もない、という確信を持って、どこまでも遠出をしていける。そうして疲れ果てたところで、同じだけの距離を歩いて帰らなければいけないということを思い出すのだ。苦痛だ。

後悔ばかりする。それでも、帰るということを忘れてからが散歩である、と何度だって思ってしまう。中也の「散歩生活」にも月が登場するけれど、遠出をしたときに月を見ると本当に、居心地がいい。あの星は私がどう動こうが、ほとんどいつもと変わらぬ動きをしてくれるから、家よりもずっと、確かな存在であるように思う。月に家があるなら、遠出をすることはもっと怖くなくなるだろうなあ、どこまで歩いたって、家は遠くならないし、帰る労力は変わらない気がするし、などと、思いつつ、いや、月は何よりもずっと遠いのだし、だからこそ、歩くぐらいで大して距離は変わらない、という絶望的な意味での「変わらなさ」なのだよな、と考え直す。月面に立った宇宙飛行士は、そこから地球を見つめたとき、きっと母国を、そしてみずからの家のあるあたりを探すはずだ。地球が丸いというそのことを、その目で確認したとき、相対的にとてつもなく小さく見える我が家。そこに、帰ろうなんて、もう思うことはできないんじゃないだろうか。もちろん、待っている家族やペットがいて、大切な本や絵がそこにはあって、「帰るつもり」ではいるんだろうけれど、でも、「帰る」ということが肉体に紐づいた、具体的なものとしてイメージできなくなるのではないか。あまりにも遠い我が家。月面で、自分がジャンプしたところで、その遠さは変わらないし、ロケットの着地地点が少し違っていても、きっと変わらないのだし、自分の肉体でなにをしようが、帰るということにつながっていかない気がしている。そして、だからこそあんな月面を探査できるのではないかなあ。宇宙服で飛び回る程度なら、迷子になることもないだろう。帰ることの困難さが上がることもないだろう。むしろ、徒歩で行く近所での散歩のように、「帰る」ということを忘れられなかったとしたら、きっと正気を保てない。月の土を踏む感触が、ぶあつい宇宙服越しにかんじられる、その瞬間に体は浮かんで、体重が急に何分の1にもなった気がする。それでももう一度飛び跳ねる、今度はあっち、次はこっち、と未開の星を飛び回るあいだ、自宅のことは忘れてしまうべきものなのだろう。そして、どうして私は月面の話なんかするに至ったのだろう?

思考、というのは、それを整理してまとめたりする段階になるまでは、ある意味、「帰る」ということを度外視して、前へ進み続けるだけの散歩に似ている。枝葉を広げていくように、思いつきを積み重ねて思考していくと、もはやどれが幹でどれが枝だったかも曖昧になるのだ。けれど、海がどこにあるのか最初からわかっていて、流れはじめた川はないはずだ。この結論を出したい、とか、誰をどう説得したい、とか、そういう最初からあったテーマのために思考を重ねていっても、それはどこまでも広がらず、結局テーマの全貌すら見えることがないように思う。もちろん、それでこそ見つかるものはある。けれど、垂れ流していった先にしかないものも多く多くあるんじゃないか。私は、寄り道が好きで、思考も寄り道が好きだから、そんなことを思ってしまう。そして、そうした散歩のように言葉を書くことも好きで、しかたがないんだ。最初からある目的のために、情報や主張を伝えるため、言葉を練るのが嫌いだ。思考より感情よりも先に、言葉を走らせて、それにひっぱられていくように、生み出されていくものを見ていたかった。それでしか辿り着くことのできない何か、私はそれを「詩」と思っているのかもしれない。帰ることを想定しない言葉、最初に出発した「家」を意図的に忘れていく言葉。海が見えないまま、書き出された言葉。それを、無意味だと切り捨てることができない。合理的な生まれではないのかもしれないけれど、でも、どうせいつかは帰らなくてはいけないのだから、いつかは思考を折りたたんで、誰かとの会話のポケットに入るぐらいのサイズにおさめなくてはいけないのだから、できるかぎりはひとりぼっちの散歩のように思考していきたいのです、言葉を書いていきたいのです。同伴者がいなくては、どこにも行けぬ体でないよ。書くたび、そう思うのです。

最果 タヒ *Saihate Tahi*

1986年生まれ。2004年よりインターネット上で詩作をはじめ、翌年より「現代詩手帖」の新人作品欄に投稿をはじめる。2006年、現代詩手帖賞受賞。2008年に第一詩集『グッドモーニング』で中原中也賞受賞、2015年には第三詩集『死んでしまう系のぼくらに』で現代詩花椿賞を受賞。第四詩集『夜空はいつでも最高密度の青色だ』は、2017年に石井裕也監督により映画化された。その他の詩集に『愛の縫い目はここ』『空が分裂する』。エッセイ集に『きみの言い訳は最高の芸術』『もぐ∞』、小説に『星か獣になる季節』『十代に共感する奴はみんな嘘つき』、対談集に『ことばの恐竜』など。ほか、清川あさみとの共著『千年後の百人一首』など。

第15回テーマ展示

中原中也の散歩生活

2018年2月15日(木)－2019年2月17日(日)

※特別企画展期間（8月2日(木)－9月24日(月・祝)）を除く

ぽけつどに手を突込んで
路次を抜け、波止場に出でて
今日の日の魂に合ふ
布切屑をでも探して来よう。

中原中也「秋の一日」より

中原中也は、昼に起床し、深夜まで街中を歩き続け、帰宅したのち本を読んだり詩を書いたりする生活を送っていました。部屋にこもるのではなく、街をあてもなく歩きまわり、歩きながら世界を肌で感じ、そこから作品を生み出していったのです。その身体性は詩に生き生きとした躍動感を与え、歩くことをテーマにした魅力的な作品へと結実していきました。その背景には、中也が好んだフランスの詩人・ランボーの作品の影響があると言われています。

本展では、中也が歩いた当時の街並みなども紹介しながら、「歩く」という行為と詩作の関係に迫りました。

1 散歩生活

中也は自ら〈大正十二年より昭和八年十月迄、毎日々々歩き通す。〉（「詩的履歴書」）と書き記すほど散歩を重視し、昼から夜まで街を歩き、帰宅してから詩作をしたり読書をしたりする生活を送っていました。実際に友人に宛てた書簡からは、頻繁に街を歩いている様子がうかがわれます。

ここでは、中也が日常生活において、「歩く」ことにどのような認識を持っていたのかを探りました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「詩的履歴書」「散歩生活」、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和5年5月21日）

2 中也、「歩行」の詩

詩作を行う上でも「散歩」を重視した中也は、「歩行」をテーマとする詩を数多く制作しています。

ここでは4つのテーマを設け、中也の詩作品を通して「歩く」ことによって培われた独特の感性と身体感覚に迫りました。

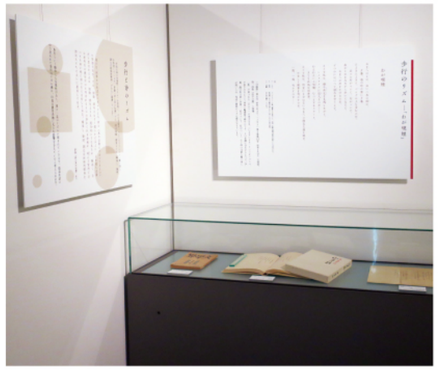
取り上げたテーマと紹介した作品

❶意志を持って
「寒い夜の自我像」「お会式の夜」

❷躍動する身体
「自滅」

❸歩行のリズム
「わが喫煙」

❹さまよい歩く
「春の消息」「早春散歩」



《主な展示資料》
中原中也原稿「寒い夜の自我像」（「ノート小年時」）、「自滅」（「ノート1924」）、「春の消息」「早春散歩」「お会式の夜」「わが喫煙」

3 歩行する詩人・ランボーと中也

中也が散歩を重視していた背景には、フランスの詩人・ランボーの詩の影響があるといわれています。観念的にならず、外を歩きながら世界を体感し、そこから作品を生み出していったランボーの文学的姿勢は、言葉や観念で定義する前の心の動きを重視した中也の文学観にも通じるところがあるといえます。

ここでは、ランボーの翻訳詩を通して、中也の「歩行」詩の背景に迫りました。

《主な展示資料》
中原中也翻訳詩原稿「感動」「わが放浪」、中原中也訳『ランボオ詩集』、中原中也原稿「芸術論覚え書」

4 散歩者の孤独と慰め

散歩を描いた中也の詩や散文作品からは、当時の街の様子が垣間見えると同時に、中也が街や群衆に対して感じていた疎外感や孤独感が浮かび上がってきます。そうした中でも、中也が散歩を続けていたのは〈亡命者のやうな私の心を慰める〉（「わが生活（明治座に）」）ものであったからだと考えられます。

ここでは、作品を通して、中也が散歩に求めていたものは何かを探りました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「わが生活（明治座に）」、「夜店」（「早大ノート」）、戦前の絵葉書（銀座の風景）

手紙でたどる散歩コース

中也が昭和5年5月8日・9日の安原喜弘宛書簡で言及している内容を元に、中也の歩いた道のりを推定し、写真や地図を使って当時の風景を再現しました。

《主な展示資料》
安原喜弘宛中原中也書簡（昭和5年5月8日／昭和5年5月9日）、煙草「エアーシップ」のパッケージ、郵便切手帖、国民交響管弦楽団第八回定期演奏会チラシ、「フィルハーモニー」第4巻第6号

特別企画展

詩が生まれた場所へ

—中也の見た風景

中原中也生誕110年

2017年7月27日[木]～10月1日[日]

詩人・中原中也は明治40年に生まれ、明治・大正・昭和の異なる時代を生き、30年という短い生涯を駆けぬけました。

中也の作品は、日常で出会ったさまざまな場所から生み出されています。故郷の景勝地・長門峡、都会のカフェー、愛児と行った動物園……。現代を生きる私たちにも共感を呼び起こす中也の詩ですが、中也が実際に見ていた風景はどのようなものだったのでしょうか。

本展では、作品の舞台や中也を育んだ「場所」に焦点を当て、当時の風景や時代風潮を紹介しながら、古くて新しい中也詩の世界を探訪しました。

展示1 ノスタルジー ～ふるさとへの視線

中也は明治40年4月29日、現在の山口市湯田温泉で誕生しました。中也は軍医であった父・謙助の任地に伴い、生まれて間もなく中国の旅順、柳樹屯（りゅうじゅとん）へ渡り、その後、広島、金沢を経て、6歳から15歳までの少年時代を故郷の山口で過ごします。中学校を3年で落第し、故郷を離れてからも中也はたびたび帰郷していますが、大人になった中也を迎える風景は、やさしく懐かしいものである一方、現実の厳しさを痛感し、自己を見つめ直す場でもありました。

展示1では、中也の生誕地・山口湯田温泉や生家、作品の舞台となっている場所を取り上げました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「一つの境涯」「童謡」「蟬」「冬の長門峡」、竹田鎌二郎宛中原中也書簡（昭和9年9月1日付）、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和7年3月7日／昭和7年7月27日付）、中原医院薬瓶、映像「甦生の大山口」

展示2 青春を過ごした場所 ～京都

大正12年春、山口中学校を落第した中也は、京都の立命館中学へ編入することとなり、親元を離れた都会での下宿生活が始まります。明治期から近代化が進められた京都の町は、国内有数のモダン都市であり、瀟洒な近代建築が立ち並ぶ繁華な大都会でした。京都で出会った友人・正岡忠三郎の日記からは、新京極などの盛り場に出入りし、自由を満喫する当時の中也の様子がうかがえます。

展示2では、中也の作品や友人の日記を手がかりに、そこに描かれた中也が学んだ立命館中学、住んでいた下宿付近や、友人たちと遊んだ場所などを紹介しました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「その頃の生活」「校長」「分らないもの」「蜻蛉」「想像力の悲歌」「恋の後悔」「（履歴書）」、正岡忠三郎宛中原中也書簡（大正14年2月23日）、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和6年11月16日付／昭和7年5月2日付）、正岡忠三郎「日記帖5」、長谷川泰子『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛』（山岸光吉宛献呈署名本）、長谷川泰子インタビュー音源

展示3 都会の雑踏

中也は大正14年春に上京し、昭和12年までの約12年間を東京で暮らしました。大正末期から昭和初期の東京は、関東大震災からの復興を目指し、古いものが新しく生まれ変わろうとする力強さにあふれていました。一方で世相にはエロ・グロ・ナンセンスの風潮がただよい、繁華街には女給のサービスを売りにしたカフェーが立ち並びました。中也も酒場やカフェーといった都会の雑踏に身を置き、そこに行き交う人々を見つめながら、詩を生み出しました。

展示3では、中也の作品と当時の写真等の資料を照らし合わせながら、中也が見つめた都会の姿を探りました。また、中也が足繁く通ったバー「ウインゾアー」で実際に使用されていた家具を特別公開。当時の酒場の雰囲気を展示室に再現しました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「（宵の銀座は花束捧げ）」「散歩生活」「カフェーにて」「酒場にて」、安原喜弘宛中原中也書簡（昭和5年5月9日付／昭和6年10月16日付／昭和8年7月3日付）、バー「ウインゾアー」で使われていた椅子とテーブル、竹田鎌二郎「日記帖10」、竹田鎌二郎が経営していた喫茶店「欅」関連資料、映像「銀座新景」、中也が聴いた流行歌音源（「女給の唄」「愛して頂戴」「月の浜辺」「サーカスの唄」）

展示4 家族と過ごした場所

中也は昭和8年、遠縁の女性、上野孝子と結婚し、四谷区花園町（現・新宿区新宿一丁目）の花園アパートでの新婚生活を始めます。翌年には長男・文也が誕生。ようやく訪れた平穏な日々のなかで、中也は創作に励みました。しかし、昭和11年、文也が2歳でこの世を去ります。悲しみに打ちひしがれた中也はやがて、文也とともに出かけた場所の記憶を、手記や詩に焼き付けていきます。

展示4では、中也の暮らしや家族との思い出から生み出された作品とその舞台を紹介し、そこに重ね合わされた中也の心情に迫りました。

《主な展示資料》
中原中也原稿「去年の秋の手紙」「夏の夜の博覧会はかなしからずや」、中原中也「日記（雑記帖）」、青山二郎「日記帖1」、「武蔵野館ニュース」第11号、「昭和館ニュース」第148号、映像「谷口商店初荷風景」「我等の淀橋区」「ドウブツエン」

特別コーナー 中也が好きだったもの

中也といえば、帽子をかぶった18歳頃の肖像写真を思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。中也の肖像写真や身につけていたものはあまり多く遺されていませんが、中也の友人たちの回想には、黒ずくめの服装だったり、ビール瓶を片手に現れたりといった、一風変わった中也の姿がたびたび登場します。

このコーナーでは、中也の愛用品や、友人たちの回想を通じて、中也の人物像を探りました。

《主な展示資料》
コート、パイプ、レコード、名刺（以上中原中也遺品）、中原中也原稿「青木三造」「わが喫煙」、昭和初期の東京の飲食店マッチ、中也使用と同型の蓄音器

企画展 Ⅰ

山頭火と湯田温泉

平成29年4月19日(水)～7月23日(日)

自由律俳句の俳人・種田山頭火は、中也が生まれた湯田温泉とゆかりが深い文学者です。昭和7年には山口市小郡に「其中庵」を結庵し、そこから頻繁に湯田温泉へ通っています。その後、湯田温泉に「風来居」を構え、中也の弟・呉郎や詩人・和田健らと深い親交を結びました。

本展では、山頭火と湯田温泉との関係を探り、あわせて中原家との接点にも迫りました。

中原家の中庭にて（昭和13年）
前列：山頭火、後列：（右より）福冨忠雄、和田健、中也の母・フク、中也の妻・孝子

展示1 山頭火の生涯

山頭火（本名・種田正一）は、明治15年、現在の山口県防府市に生まれました。自由律俳句の雑誌「層雲」誌上で才能を発揮し、俳句の世界で名が知られるようになりますが、実家の酒造業が破産。その後出家し、僧として全国を放浪しながら句作を続け、57歳で亡くなりました。

ここでは、創作活動の拠点となった雑誌「層雲」や、山頭火の集大成ともいえる一代句集『草木塔』にも焦点を当てながら、山頭火の生涯を紹介しました。

展示2 湯田温泉に通う ――「其中庵」時代

昭和7年9月、山頭火は現在の山口市小郡に「其中庵」を結庵します。そこから頻繁に湯田温泉に通い、湯田温泉にまつわる句をたくさん生み出しました。

ここでは、「其中庵」時代の山頭火に焦点を当て、当時の湯田の風景を紹介しながら、山頭火の湯田温泉への思いに迫りました。

展示3 湯田温泉と文学 ――山頭火と雑誌「詩園」

昭和13年頃から、山頭火は湯田温泉の文学青年たちと交流し、『山口県詩選』の出版記念会に出席したり、同人雑誌「詩園」に作品を寄せたりしています。

ここでは、山頭火の湯田温泉における文学活動について紹介し、あわせて山頭火と親交の深かった詩人・和田健についても取り上げました。

展示4 湯田温泉に住む ――「風来居」時代

昭和13年11月、山頭火は湯田温泉に移住し、「風来居」を構えます。この時期、山頭火は、「詩園」の同人や、中原中也の弟・呉郎らと交友を深め、中原家にもたびたび顔を出しています。

ここでは、呉郎をはじめ中原家の人々と山頭火との関係について紹介しました。

展示5 山頭火が読む中也の詩

同じ時代を生き、湯田温泉にもゆかりが深い山頭火と中原中也ですが、生前二人が会うことはありませんでした。しかし、山頭火は中也の詩「閑寂」の「蛇口の滴は、つと光り！」という表現を、「これは俳句だ」と言ったといわれています。

ここでは、俳句と詩というジャンルを超えて、山頭火と中原中也との文学的接点を探りました。

《主な展示資料》

山頭火遺品、個人誌『三八九』、雑誌『層雲』『詩園』、山頭火色紙・短冊、池原魚眠洞宛山頭火書簡、和田健著書『一代句集『草木塔』

企画展 Ⅱ

コラボレーション企画（前期）

コミックのなかの中也

中原中也生誕110年

平成29年10月4日(水)～平成30年1月21日(日)

本展は、中也や中也の詩が物語に深く関わるコミック5作品を取り上げ、それぞれのあらすじや特徴について紹介しました。また、コミックの作者にご協力いただき、描きおろしのイラストやコメントをお寄せいただきました。そして、それらを通じて、作品にみられるそれぞれの中也像や、その原点にある中也と中也の詩の魅力に迫りました。

展示1 「文豪ストレイドッグス」

朝霧カフカさんの描き下ろしコメントと、春河35さんによる描き下ろしイラストを展示しました。また、作中人物「中原中也」の異能力の設定に苦心し、結局、重力を自由に操れる設定に至ったという朝霧さんのコメントを受けて、現実の中也が自由に操ったのは「言葉の重力」ではないか、という視点から、仮想鼎談を創作し、発言録形式で展示しました。

展示2 「文豪失格」

千船翔子さんの描き下ろしコメントとイラストを展示しました。また、まだ無名の詩人であった宮沢賢治の『春と修羅』を中也が愛読していた、というエピソードが好きだ、という千船さんのコメントを受けて、中也と賢治がともに登場する作中シーンをパネルに抜粋し、中也の賢治論が掲載された雑誌「レッツェンゾ」とともに紹介しました。

展示3 「眠兎」

浅田弘幸さんの描き下ろし直筆イラストをはじめ、以前浅田さんご本人から館にご寄贈いただいた書籍や色紙を展示しました。また、作中に引用されている中也の詩「生ひ立ちの歌」の抜粋パネルも、詩が引用されているシーンとともに展示しました。

展示4 「最果てにサーカス」

月子さんの書き下ろしコメントとイラストを展示しました。また、作中の小林秀雄と中原中也が出会い、小林が中也の天才を認めるシーンに引用されている「月夜の浜辺」を、初出誌「新女苑」とともに紹介しました。

展示5 「含羞」

曽根富美子さんのコメントと、画家としても活躍されている曽根さんが描いた油絵作品と曽根さんが中原家を訪問した際の思い出の品を展示しました。また、作中の中原中也が叫ぶ〈おれ自身でありたいだけなんだ！〉という台詞の意味について、中也の詩や書簡の引用とともに論じました。

《主な展示資料》

描き下ろしコメント（朝霧カフカ、千船翔子、月子、曽根富美子）、描き下ろしイラスト（春河35、千船翔子、浅田弘幸、月子）、北乃咲喜（曽根富美子）作の油絵、「レッツェンゾ」第5年第6号、「新女苑」第1巻第2号

『文豪ストレイドッグス』
「ヤングエース」平成25年―連載中（平成30年3月現在）　原作／朝霧カフカ　漫画／春河35
◎現代横浜を舞台に、中島敦、太宰治、中原中也などの実在する文豪をモチーフにしたキャラクターが、それぞれの作品名を冠する異能力を駆使して活躍するアクションバトル漫画。

『文豪失格』
「COMIC リュエル」平成27年―連載中（平成30年3月現在）　作／千船翔子　監修／一柳廣孝
原作／AIR AGENCY・フロンティアワークス
◎中原中也をはじめ、宮沢賢治、太宰治といった、名だたる文学者たちが、天国の出版社で繰り広げる騒動を、文学者にまつわる実際にあったエピソードを交えながら描くギャグ漫画。

『眠兎』
「月刊少年ジャンプ」平成3年―平成4年
作／浅田弘幸
◎親との間に悲しい過去を持つ二人の高校生が出会い、互いを理解することで自己を知る物語。中也の詩が重要なモチーフとなっている。

『最果てにサーカス』
「月刊！スピリッツ」平成27年―平成28年（第一部）　作／月子
◎中原中也、小林秀雄、長谷川泰子の三角関係を軸として、実話にフィクションを交えながら描いた青春群像劇。

『含羞』
「コミックモーニング」平成元年―平成2年
作／曽根富美子
◎長谷川泰子を挟んで交わされる中原中也と小林秀雄の交友を、大正末から昭和初期の時代の空気とともに描き出した作品。

企画展Ⅱ

コラボレーション企画（後期）

山口盆地考2018
…… 吹き来る風が……

平成30年1月24日（水）～4月15日（日）

主催：公益財団法人 山口市文化振興財団
　　特定非営利活動法人 山口現代芸術研究所（YICA）
協力：山口メセナ倶楽部
　　山口県総合芸術文化祭 2017

山口現代芸術研究所（ＹＩＣＡ）は平成10年の設立以来、県内外や海外アーティストとの交流、展覧会、ワークショップなど、現代アートの普及に着実な成果を積み重ね、今年（平成30年）20周年を迎えます。

「山口盆地考」は、平成21年に開催した展覧会「山口盆地午前５時」、平成22年の連続講座『「山口盆地」考』を経て、平成24年2月開催の「山口盆地考―閏（うるう）―」以来、ＹＩＣＡがほぼ毎年開催している現代アートのグループ展です。スコットランドの生物学者・教育家・都市計画家パトリック・ゲディス（一八五四―一九三二）のヴァレー・セクション（川の流域に沿って生活文化が形成されることを示し、芸術・環境・教育を統合的に理解するための視覚イメージ）を出発点に、アートの表現を通して山口の歴史や文化を自然環境と一体のものとして見つめ直すことを目指しました。

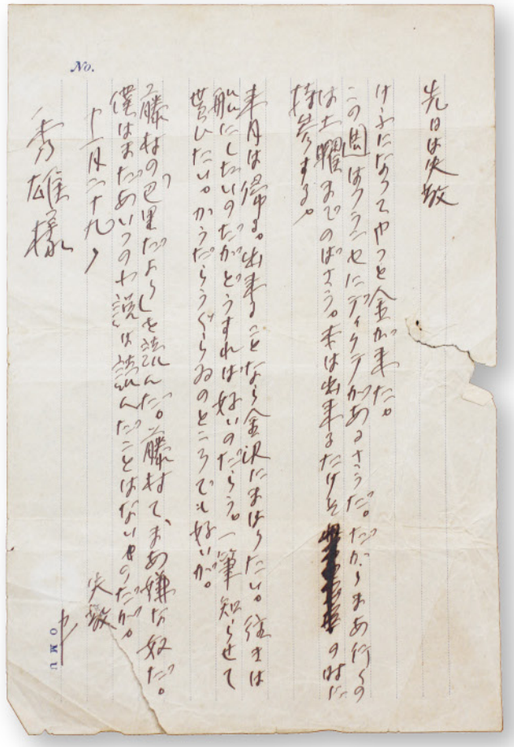
本展では、中原中也の代表作「帰郷」の一節「あゝ　おまへはなにをして来たのだと……／吹き来る風が私に云ふ」をテーマに選び、19人の作家が自由な発想と多様な素材により中原中也記念館の屋内外で作品を展示しました。

出品作家

小畑徹
坂本杏苑
澤登恭子
嶋田日出夫
白川美幸
末永光正
鈴木啓二朗
中野良寿
原井輝明
范叔如
藤木律子
松尾宗慶
松野真知
森秀信
渡辺栄
鈴木淳
谷尾勇滋
寺田就子
宮本博史

【新収蔵資料紹介】

小林秀雄宛中原中也書簡（大正15年11月29日）



大正14年3月、18歳の中也は、恋人の長谷川泰子と共に上京し、新生活を始めました。

その際にいち早く友人となったのが小林秀雄です。現在では日本の文芸批評の祖とも称される小林ですが、当時は東京帝国大学の学生でした。

中也と泰子は小林の家の近くに住み、交友を深めました。出会いから約半年後、泰子が小林のもとに去るという出来事により、二人の交友は一時途絶えます。しかし、中也が小林へ送った手紙の日付から、翌年11月には交友が復活していたことがわかります。

本書簡は、その頃に書かれたものです。内容は近況報告が主で、当時の中也の生活ぶりがうかがえます。また、島崎藤村の随筆を読んで、〈藤村て、まあ嫌な奴だ〉と率直な感想を伝えたりもしています。

中原中也と小林秀雄という偉大な二人の文学者の若き日の交流を直に感じられる大変貴重な資料です。

雑誌「羅甸（らてん）区」第1号・第2号

雑誌「羅甸区」は、詩人・吉田一穂（いすい）の編集により羅甸区詩社から発行された文芸同人誌で、第1号が昭和2年2月1日、第2号が同年3月1日に発行されています。

誌名の〈羅甸区〉はパリの学生街カルチエ・ラタンのことで、ヨーロッパ各地から集まった学生たちがラテン語で語り合ったことに由来する地名です。吉田は第一詩集『海の聖母』（大正15年11月15日、金星堂）のパート名にも〈羅甸区〉を用いており、第1号の編集後記（「羅甸街眺望」）には、その自由で清廉な雰囲気への憧れが読み取れます。

創刊同人は、吉田の他、金子光晴、佐藤一英（いちえい）、佐藤英麿、神谷暢（のぶる）、春山行夫、東野純、加藤直一、大鹿卓（おおしかたく）の9名で、第1号には、佐藤一英を除く全員が詩作品を発表し、翌月発行された第2号には、東野、加藤、佐藤英麿、大鹿の詩と春山の評論の他、草野心平、尾形亀之助の詩、手塚武の評論が掲載されています。

第2号の編集後記（「白き拉典（らてん）区」）には刊行をめぐる苦難を嘆きながらも次号に向けての意気込みが語られていますが、『定本　吉田一穂全集』別巻（平成5年4月30日、小沢書店）の年譜によれば、吉田と佐藤英麿の作品のみを掲載した第3号（昭和3年3月発行）をもって、「羅甸区」は廃刊となったようです。

これまで実物に触れる機会がなかった文芸同人誌で、第2号には尾形亀之助の全集未収録詩「無題」が掲載されているなど、中也と同時代の詩壇の活動を知る上で貴重な資料です。

中原中也 生誕110年

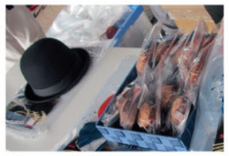
生誕一一〇年に寄せて

中原中也は平成29年に生誕一一〇年を迎えました。
当館では記念の展示やイベントなどを開催しました。
また、全国各地でもさまざまな記念イベントが催されました。

記念館事業

SL「やまぐち」号×中原中也コラボレーション SL「やまぐち」号 中也dayイベント

平成29年10月14日



西の京「やまぐち」と「津和野」を結ぶSL「やまぐち」号が、中原中也オリジナルのヘッドマークを掲げて、1日限定の運行を行いました。この日、SLの出発駅であるJR新山口駅のホームでは、中也風の格好をした地域のボランティアの方による中也の帽子をイメージしたパンのプレゼントや、ヘッドマークの前での記念撮影が行われ、訪れたSLファンと中原中也ファンの方々が楽しんでいました。

車内では福田名誉館長から中也の詩やJR山口線沿線にまつわる文学者の話がアナウンスされ、中也と山口のエピソードを知っていただくきっかけとなったイベントでした。

文豪ストレイドッグス× 中原中也記念館スタンプラリー in 湯田温泉

平成29年10月4日～平成30年1月21日

「文豪ストレイドッグス」の登場人物9人をラリーポイントのキャラクターとした、湯田温泉界隈を巡るスタンプラリーを実施しました。ポイント毎に、中也と登場人物のミニエピソードも紹介し、中也や湯田温泉の魅力に迫ることができる企画として、作品のファンの方だけでなく家族連れの方など延べ約一万八千人にご参加いただきました。特に週末は湯田温泉のラリーポイントとなった施設や協力店舗を訪れる参加者で賑わいました。全国、さらには海外からのお客様もいらっしゃり、若年層に「詩人・中原中也」を知っていただくイベントとしてご好評いただきました。

合唱団 響 合唱オペラ「中也！」山口公演

平成29年9月10日 山口市民会館

今回の合唱オペラ「中也！」では、中原中也や太宰治その他の実在した有名な人物をリアルに演じなければならないという点において、これまで私たち合唱団響が経験したことのない領域への挑戦となりました。果たして本物の中也達の真実の姿にどれだけ近づくことができたのか…。合唱オペラ「中也！」における彼の詩との出会いは、比喩的な意味合いを超えて、まさしく中也本人との出会いであったと思えてなりません。彼の生まれ故郷・山口の地で、彼が見ていた風景を見て、彼が眠るお墓を訪ねて、その存在をより身近に感じながら演奏できたことは、極めて貴重な経験でありました。演奏会当日に、中也も山口市民会館に見に来てくれたのではないでしょうか。「ふん、あれが俺だって？　だが、まあ面白えじゃねえか。」などと内心喜んでくれたのでは、と勝手に想像しています。あらためまして、「中也！」の再演に多大なお力添えをくださった山口の皆様に、心からの感謝を申し上げます！

合唱団 響 代表　堀津 誠
（合唱オペラ「中也！」中原中也役）

こおりやま文学の森資料館 特別企画展 「中原中也 祈りの詩」

平成29年10月7日～11月26日

こおりやま文学の森資料館
佐久間 正明

福島県郡山市のこおりやま文学の森資料館では、平成29年10月7日から11月26日にかけて、特別企画展「中原中也 祈りの詩」を開催した。

お客様の中には、神奈川県川崎市から三度来館されたという四十代の男性がおられた。観覧者の傾向として先ず挙げられるのは、郡山市外から、そして複数回来館された方が多数いらっしゃったという点である。

また、寄せられた感想の中に「自分に響く詩を見つけられて詩に興味を持てた」(十代・女性)、「ある面から光を当てた中原中也の姿がよく知れたと思います」(二十代・女性)というものがあった。このように十代、二十代の来館者が多かった点も、普段見られない傾向である。

そして、幅広い年齢層の来館者に共通する点は、中也の詩を深く読み込んでいるということであり、特筆すべき点の一つと言えよう。

中原中也の展示は、福島県内でも要望の強かったものの一つであり、生誕一一〇年という記念の年に展示を行えたことは、有意義であったと考えている。

「中原中也が結ぶ　福島と山口の絆」

中原中也と詩との出会い

ポエム「福島空の会」　佐々木政夫

私は、東日本大震災と原発事故に遭い、心の揺れ動くまま時を過ごしていました。そんな時に出会ったのが福島市主催の『創作詩ワークショップ「福島に生きる」』でした。その時の9人が「中原中也生誕祭・空の下の朗読会」を訪れ、自作の詩を朗読しました。それがきっかけとなり福島で詩のサークルを作りました。

私たちは、月一回、例会を開催しているほか毎年詩集「蒼い空」を出しています。その中で、山口の「楽しい朗読」の皆さんとの交流も生まれました。

昨年は、福島市制施行一一〇周年と中原中也生誕一一〇年を記念して、福島市で「中原中也が結ぶ　福島と山口の絆」という対談と交流朗読会が開催され、山口の皆さんとも楽しい時間を過ごすことができました。私は、詩とは無縁でしたが、詩を知り、多くの方々と出会えたことに感謝をしています。

山口きずな音楽祭vol.9

「中也をうたう」

平成29年12月25日 山口市民会館

「山口きずな音楽祭」は、日本で初めてクリスマスミサが執り行われた地・山口の歴史を、音楽を通じて伝えるプロジェクトとして始まりました。「中也をうたう」というサブタイトルがついた第9回は、3組のアーティストが参加し、中原中也の詩の楽曲を中心に演奏を行いました。

LE VELVETS（ヴォーカルグループ）

きずな音楽祭が終わってからも、中原中也に想いを馳せる時間がたびたびあります。今回オリジナルの曲を作るにあたって、中原中也記念館の館長をはじめスタッフの皆様に大変お世話になりました。遺作となった「四行詩」に込められた再起への想い。帰郷に込められた望郷と自省。詩のバックグラウンドを教えていただくうちに、中原中也の生き方そのものにも興味を持ちました。中原中也を自分たちなりに感じ、お客様と共有できたことが嬉しいです。きっと会場のどこかで聴いてくれていた、中原中也が喜んでくれていたことを祈っています。

中井智彦（表現者・俳優・歌手）

生誕一一〇年に山口で中也を演じることができ大変嬉しく思います。今回は僕の弾き語りによる表現と一緒に「愛する女性」「自然」「ピエロ」と変幻に姿を変える「藝術」をダンサーの米島史子さんに表現してもらい、中也への新しい切り口を見つけることができました。きずな音楽祭の皆さん、中原中也記念館さんのご協力あって形になった物語。これからも進化を続け、新たな中也をお届けできるよう精進します。また山口に帰ってきます！

辰巳真理恵（ソプラノ歌手）

生誕一一〇年、没後八十年の記念すべき年に、私が中学時代からもっとも敬愛する詩人・中原中也の歌曲を、彼の生まれ故郷にて歌わせていただくことが出来、とても光栄でした。ジュネーヴ国際音楽コンクール作曲部門で日本人初優勝した新進気鋭の作曲家・藪田翔一氏の、繊細でどこか哀しく、温かく、美しい旋律に乗せて、その詩がお客様の心に届いてくれるよう精いっぱい心を込めて歌いました。これからも、中也の世界が、少しでも多くの皆様に伝わるよう、歌い続けていきたいと思います。

前列 LE VELVETS、後列左 辰巳真理恵、右 中井智彦

主なできごと（平成29年度 記念館行事記録）　2017年4月― 2018年3月

4月1日　特別展示：震災復興応援企画（前年度から継続）
当館と福島市およびNPO法人「創る村」との交流事業を紹介

19日　企画展Ⅰ「山頭火と湯田温泉」（～7月23日）

26日　特別展示：第22回中原中也賞（～5月28日）
野崎有以『長崎まで』

28日　第155回 中原中原中也を読む会
第22回中原中也賞受賞作 野崎有以『長崎まで』を読む

29日　生誕祭「空の下の朗読会」（中原中也記念館前庭）
自由参加の朗読（朗読参加者46名）
小室等＋こむろゆい コンサート

第21回中原中也賞贈呈式（湯田温泉ユウベルホテル松政）
受賞詩集：野崎有以『長崎まで』（思潮社）
記念講演「詩歌への作曲」
講師：西村朗
主催：山口市、（公財）山口市文化振興財団

5月26日　第156回 中原中也を読む会
企画展Ⅰ「山頭火と湯田温泉」見学

6月3日　山頭火×中也×モノづくり　てぬぐいワークショップ
講師：田吹東悠

23日　第157回 中原中也を読む会
学芸担当職員が選ぶ中也の詩

7月27日　特別企画展「詩が生まれた場所へ―中也の見た風景」（～10月1日）
オープニングセレモニー開催

28日　第158回 中原中也を読む会
屋外展示「旅の詩」―「羊の歌」「（とにもかくにも春である）」を読む

8月5日　プロムナード・トーク① 特別企画展解説

19日　製本ワークショップ「オリジナル中也詩集を作ろう！」
講師：秦博志

25日　第159回 中原中也を読む会
特別企画展「詩が生まれた場所へ―中也の見た風景」見学

26日　プロムナード・トーク② 特別企画展解説

31日　機関誌「中原中也研究」第22号発行

9月2日　中也カフェー ～蓄音器コンサート in ぽなーる（喫茶ぽなーる）
出演：中原豊

9日　プロムナード・トーク③ 特別企画展解説

16日　講演会「希望の風景としての建築～中也が生きた時代の空間のつくり手たち～」（山口県政資料館）
講師：斉藤理

22日　第160回 中原中也を読む会
長田弘の詩を読む

23日　公開講演「読んじゃったよ、中也！」（ホテルニュータナカ）
講師：倉橋健一　共催：中原中也の会

10月4日　企画展Ⅱ（前期）「コミックのなかの中也」（～平成30年1月21日）

文豪ストレイドッグス×中原中也記念館
スタンプラリーin湯田温泉（～平成30年1月21日）（湯田温泉界隈）

山口お宝展（～10月29日）
中原中也筆小林秀雄宛封書、
小林秀雄宛中原中也献呈署名入り『山羊の歌』の特別展示
主催：山口商工会議所

14日　SL「やまぐち」号 中原中也dayイベント

10月22日　中也命日

中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ（経塚墓地、中原中也記念館）

第2回ほうしの詩人賞～あつまれ！未来の中也たち！～
表彰式・入選作品朗読会
入選作品展示（～平成30年1月21日）

メイシ交換会（中原中也記念館前庭）

28日　第161回 中原中也を読む会
企画展Ⅱ（前期）「コミックのなかの中也」見学

11月11日　講演会「東日本大震災に学ぶ」（山口市立平川中学校）
講師：和合亮一

24日　第162回 中原中也を読む会
屋外展示「旅の詩」―「頑是ない歌」
「夏過けて、友よ、秋とはなりました」を読む

12月1日　山羊の日イベント（～12月10日）
特別展示：宮沢賢治『宮沢賢治全集』、中原中也『山羊の歌』

22日　第163回 中原中也を読む会
福田名誉館長と「夕照」を読む

2018年 1月18日　入館者70万人達成

1月24日　企画展Ⅱ（後期）「山口盆地考2018.....吹き来る風が.....」（～4月15日）

26日　第164回 中原中也を読む会
企画展Ⅱ（後期）「山口盆地考2018.....吹き来る風が.....」見学

2月15日　第15回テーマ展示「中原中也の散歩生活」（～平成31年2月17日）

18日　開館24周年

23日　第165回 中原中也を読む会
蓄音器で聴く中也ゆかりの音楽

28日　特別展示：「中也の関係者が語る関東大震災」
全国文学館協議会加盟館との共同展
「3.11 文学館からのメッセージ」への参加企画（～3月25日）

3月23日　第166回 中原中也を読む会
テーマ展示「中原中也の散歩生活」見学

31日　館報第23号発行

中原中也の会

5月21日　中原中也の会第21回研究集会
「大岡信と中原中也 ――シリーズ 戦後詩人と中原中也1」
（県立神奈川近代文学館）
総合司会：疋田雅昭
パネルディスカッション「大岡信の中原中也受容をめぐって」
パネリスト：竹本寛秋、加藤邦彦
講演「近代詩と翻訳、現代詩と言葉」
講師：藤井貞和

7月31日　会報第42号発行

9月23日　中原中也の会第22回大会
「中也の詩、読んじゃいなよ！」（ホテルニュータナカ）
総合司会：権田浩美
講演「読んじゃったよ、中也！」
講師：倉橋健一
トーク・トーク・トーク!!!「中也の詩、読んじゃいなよ！」
出演：三角みづ紀、林秋絵、彦坂美喜子

18日　中原中也の会第18回セミナー（中原中也記念館）
中原中也記念館特別企画展
「詩が生まれた場所へ―中也の見た風景」見学
解説：菅原真由美

文学散歩 湯田温泉界隈

12月25日　会報第43号発行

第23回中原中也賞

『狸（たぬき）の匣（はこ）』

マーサ・ナカムラ氏

第23回の中原中也賞は、公募および推薦による174点の詩集の中から、マーサ・ナカムラ氏の『狸の匣』（思潮社）が選ばれました。

ナカムラ氏は平成2年生まれの27歳（受賞時）。早稲田大学文化構想学部文芸・ジャーナリズム論系を卒業し会社員として働くとともに、『現代詩手帖』に詩を投稿し、平成28年には第54回現代詩手帖賞を受賞しています。

受賞作『狸の匣』はナカムラ氏の第一詩集で、「犬のフーック」以下の全20編が収められています。選考会では、詩を通してあらゆる時代に潜り込むことのできる面白さが注目され、言葉を操る天才的な力量が評価されました。

作者はどの時代にも潜り込むことができて、時間や空間の扱い方とその柔軟さ、そこに秘められたユーモアは天性のものと言える。昭和史を描き、家族を描き、それをクロスさせて一冊の詩集に閉じ込める力わざは、長編小説を読んだときのような魅力がある。（「選評」より）

叔父が立ち止まる地点には、決まった時間になると、
上流から母の笑った顔が川幅いっぱいに広がって流れてくるのである。
土手に張る、白い石台の上に叔父は立つ。
対岸の青々と葉の繁る低木には、白い鳥が群れて羽を休めている。
小さな私は、叔父の乾いた大きな手を快く思っている。

流れてきた 流れてきた
叔父の手が離れる
川の幅いっぱいに面影が流れてくる。
ある日の母の笑顔を写真のように切り抜いた映像（シーン）が流れてくる。
いつものように、叔父が長い竹竿ですくうと、
長い湯葉のようなものが竿に垂れ下がる。
薄白い物体にはなんの印刷も施されていないことを確認して川へ戻すと、
母の顔は少しひしゃげて、下流へ流れていくのであった。

（「湯葉」より）

Nakahara Chūya prize 23rd

◎平成30年度 記念館関連行事予定　2018年4月 ―2019年3月

展示

平成29年度企画展Ⅱ（後期）
「山口盆地考2018 .....吹き来る風が.....」
（1月24日～4月15日）

第15回テーマ展示
「中原中也の散歩生活」
（2月15日～2019年2月17日）
※特別企画展期間を除く

企画展Ⅰ
「中也、この一篇――「帰郷」」
（4月18日～7月29日）

特別企画展
「大岡昇平と中原中也」
（8月2日～9月24日）

企画展Ⅱ
「文士の肖像 ――林忠彦写真展」
（9月27日～2019年4月14日）

第16回テーマ展示
「四季の詩」（仮）
（2019年2月20日～2020年2月下旬）

イベント・記念日

湯田温泉 白狐まつり
（4月7日・8日）〈無料開館日〉

生誕祭 空の下の朗読会
（4月29日 中原中也記念館前庭）〈無料開館日〉

こどもの日
（5月5日）〈無料開館日〉

中也忌～墓前祭と中也に捧げる夕べ
（10月21日）

中也命日・お墓参り
（10月22日）〈無料開館日〉

山羊の日
（12月10日）

開館25周年
（2月18日）

中原中也を読む会

毎月　第4金曜
中原中也記念館等

中原中也の会

中原中也の会第22回研究集会
（5月19日　県立神奈川近代文学館）

中原中也の会第23回大会
（9月15日　セントコア山口）

中原中也の会第19回セミナー
（9月16日　セントコア山口・中原中也記念館）

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第23号】 平成30年3月31日
発行◎ 中原中也記念館　〒753-0056　山口県山口市湯田温泉一丁目11-21　TEL 083-932-6430　FAX 083-932-6431　E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp　http://www.chuyakan.jp/
環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。